

少年が行く幻想学園

スカイマーク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

9歳で極普通な少年はある事に気付いた。

いや、「思い出した」の方が正確で正しいだろう。

忘れ去られた記憶と「此の世に産まれて来た本来の理由」を

それは少年にとつて禁断の果実であり「運命」である。

少年には両親と妹がいる。

妹は兄に優しく頑張り屋。

両親は少年に対して冷たく悲惨だつた。

妹には優しかった。

妹には内緒に裏で少年は虐待されていた。

何故、妹だけには優しいのか。

それは本物の家族だからだ。

そう、この少年は「養子」であり、

「人間によつて作られた人間」人工人間である。

3／17 挿絵を描きました。

目次

Prologue

始まりの日

本編

家族 前編

家族 後編

幻想学園と出会い 前編

幻想学園と出会い 中編

幻想学園と出会い 後編

ハプニング

設定 主人公

2人の担任

協力者

2人の同居人

誘い

62 57 51 46 43 39 32 25 19 15 9 1

Prologue

始まりの日

9歳で極普通な少年はある事に気付いた。
いや、「思い出した」の方が正確で正しいだろう。
忘れ去られた記憶と

「此の世に産まれて来た理由」を

それは少年にとつて禁断の果実であり「運命」である。

少年には両親と妹がいる。

妹は兄に優しく頑張り屋。

両親は少年に対して冷たく悲惨だつた。

妹には優しかった。

妹には内緒に裏で少年は虐待されていた。

何故、妹だけには優しいのか。

それは本物の家族だからだ。

そう、この少年は「養子」であり、

「人間によつて作られた人間」である。

俺の名前は「ケンシ」苗字がない人間だ。
何故苗字がないか？

それは俺は「人間に作られた人間」だからだ。

説明すると俺はアメリカ政府とアメリカ軍が研究している「人工兵士計画」の第1号として生まれたのだ。

「人工兵士」とは「戦争の為」に産み出された人工人間の事である。髪の色や身長、性格も肌の色も人の手に寄つて作られ、痛みや感覚といった神経がナノマシンで制御される。

人間の血液の色は赤い。

だが俺たち人工人間は「人工血液」という人工的に作られた白い血液が循環している。

人は女性の体から産まれるが人工人間は違つた。

子宮と同じ役割を果たすカプセルで産まれるのだ。

そして6年間軍で鍛え上げられ人工兵士となり15歳で戦場へ送られる。

まさに「兵器」である。

人工兵士には三つのタイプが存在している。

一つ目はサイボーグタイプ。

人外骨格を体に融合させ本来の力をはるかに上回る事ができる。ナノマシンによる量子変換の技術が俺が産まれる前に実用化されていた為か人外骨格を体内に循環するナノマシンへと量子変換する事ができる。

二つ目はドラッグブースタータイプ。

言葉通り、違法ドラッグを体に注射し一時的に反応速度を上げる事が出来る。

暗殺に向いている為、戦場ではドラッグブースターは導入されていない。

最後に三つ目は、ノーマルタイプ。

これも言葉通りで、一般兵の武装で狙撃を得意とする。

俺はどのタイプに入るかと言うと、全てである。

第1号として産まれた俺は戦闘に優れた。

その為いろんな仕事をして来た。

極秘作戦、暗殺、スパイ、スニーキングミッション、抹殺など様々

な仕事をこなしている。

だがそんな俺には家族が居た。

だが俺にとつては家族とは思わなかつた。

妹がひとり居たが両親は俺に冷たく、妹が居ないところで虐待されていた。

妹は俺に優しく頑張り屋さんだつた。

しかしそんな妹でも今じゃ妹とは思わない。

記憶が戻るまでは。

人工人間は産まれてから9年間までは普通の人間として育てられる。

その為、9年間まで自分が「普通の人間」だと当たり前に思つてしまふのだ。

しかし9年間を過ぎるとナノマシンが真実を伝える。

両親だつた者に恨みを持つ俺は家を出て横浜基地へと向いアメリカで6年間訓練を受けて来たのだ。

3月の初めの日。

アメリカのサニー基地に居る俺は今、俺の上司であるマスターズ大佐に飛び出された。

38歳の彼はイラク戦争で一躍有名となつたスナイパー「アメリカンスナイパー」と呼ばれているヒーローと共にし戦つた戦士だ。

とてもニューモアで誰にでも親しまれています。

ブラウンの軍服の彼に俺は敬礼していた。

大佐は「解いていいぞ」と敬礼を解かせる。

大佐のオフィスであるのか少し意識してしまう。

ケンシ「話は何でしようか？ 大佐。」

自分の椅子に深々と座っている大佐に俺は要件を聞いた。

どうせ任務だろう。

だが大佐がせきばらいした後、とんでも無い事を言つたのだ。

マスターズ「いきなりで済まないが今日からお前は軍から抜けてもらう。」

ケンシ「…………え？」

大佐の言葉に俺は思考が停止した。

すると大佐は苦笑した。
マスター「いや済まない、ジヨークだジヨーク。別に軍をやめろ
とは言つてない。」

ケンシ「は、はあ…」

3年間基地や戦場で共に過ごして来た中で多分一番に驚いた
ジヨークだった。

気を取り直した大佐は言葉を発する。

マスター「実は政府から直接お前宛の依頼が来たんだ。それがコ
レだ。」

机の引き出しからA4サイズの茶色の封筒を取り出し俺に渡した。
開けてみろ、と言われ俺は封筒の中を開けた。

すると文字がビツシリと埋め尽くされた紙があつた。

手に取り軽く目を通した。

これは任務の依頼書だった。

依頼は調査と長期間滞在。

だが国内では無く海外だった。

だから長期間滞在なのか、と思つた。

しかし更に目を通すと滞在する国が戦場のシリアでもアフガンで
もキプロスでもなかつた。

日本だつた。

俺にとつてはあの国は悪い思い出しかない。

ケンシ「……日本でアセスメント、ですか？」

マスター「いいや、一応合っているんだが違う。」

大佐は横に首を振つてそう言う。

そして説明し始めた。

マスター「表ではそう書かれているが、実はこの任務を下したのは
我が国アメリカとジャパンだ。」

その言葉を聞いた俺は直ぐに重大な任務だと思った。
俺は眉根を寄せ大佐の言葉を聞いた。

マスター^ズ『『人工兵士計画』のナノマシン技術ぶ最高責任者『ロナルド・バー^ラ』を知つてゐるか?』

当然知つてゐる。

ナノマシンの技術学を最初に解いた有名な科学者、ロナルド・バー^ラ。

アフガニスタン出身、今年で59歳になる彼は大学時代努力家だったそうだがいつもひとりだつたそうだ。

人工兵士計画に関わつておりサイボーグタイプ、ドラッグブースタータイプ、ノーマルタイプを開発したのだ。

俺は知つていると大佐に言つた。

すると大佐は少し間を置いて、思いもよらない事を言つた。

マスター^ズ「そのバー^ラが先月末、行方不明になつていた。」一瞬言葉を失つたが俺は何故バー^ラが行方不明だつた事を隠していたのか大佐に問う。

大佐は政府が極秘にしていた、と言う。

有名な科学者が行方不明だと知れば合衆国民、いや世界全土がパニックになるだろう。

マスター^ズ「だが2週間前に我が軍の衛星がバー^ラらしき人物を捉えた。場所はトーキョーのヨコハマタウンでだ。」

大佐はまた引き出しに手を差し伸べ物を取り出した。

衛星写真で撮つたバー^ラの頭上の写真だつた。

その写真をして受け取り視野に入れる。

場所はチャイナタウン。

彼の特徴のスキンヘッドと上^{頭部}に小さな太陽の刺青がハツキリと写つていた。

だが彼の左右そして前後に黒いス^{ーツ}に身を纏つた者達が彼を護衛するかのように居る。

ケンシ「バー^ラの周りに居る黒いヤツらはなんですか?」

マスター^ズ「分からん、恐らくバー^ラが行方不明になつた理由はこいつらがバー^ラを誘拐したと我々は考えている。」

ケンシ「と言う事はヤツらは……」

俺は推測した。

バー・バラを誘拐すると言う事は何か理由があるはず。
彼に対する個人的な恨みでの誘拐は低い。

だとすれば彼の科学力とナノマシン技術を目的とした誘拐が高い。

ケンシ「：他国の工作員、もしくは武装組織：」

そう考えるしかありえない。

大佐はその可能性が高い、と言う。

マスターズ「表は調査だが本当の任務は『バー・バラの搜索及び救出』
また『バー・バラを誘拐した者達を逮捕及び抹殺』この2つだ。お前が
この任務に推薦され理由はこれまでの功績があるこそだ。引き受け
るか？」

ケンシ「喜んで引き受けます！」

紙を封筒に戻し俺は大佐に敬礼した。

大佐はうむ、と頷いた。

マスターズ「本任務はジャパンも加わっているその為ジャパンから
ある人物が派遣された、その人物はお前の日本へ滞在中生活面でのサ
ポートをしてくれるそうだ。」

その時だった。

ドアの方からトントン、とノックする音が聞こえた。

マスターズ「おっ？噂をすれば来たな。」

入れ、と大佐は大声でドアの向こうに居る人物にかけた。
返事を返すかのようにドアが開いた。

スース姿で赤い瞳を持つ金髪の女性だつた。

???「失礼しますマスターズ大佐。」

英語で話す彼女に大佐は椅子から立ち上がり「ちようどいいところ
に来てくれた、ミス ユカリ彼がケンシだ自己紹介してくれ。」と言
う。

彼女は大佐の机の前に居る俺のところまで笑顔で來た。

紫「初めてましてミスター ケンシ。私の名前は八雲 紫よろしく
ね。」

彼女、紫は俺に手を差し出し挨拶する。

マスター^ズ「ユカリはジャパンの国防省に勤めていて大学時代マツド博士と友人だつたそうだ。」

日本の国防省に勤めていてマツド博士と友人が。

マツド・カーリー

彼女は人工兵士計画で最高責任者で人工人間を作った科学者。つまり俺達人工人間から見ると彼女は偉大なる産み親である。

アメリカ出身でオックスフォード大学を卒業、目の前に居る紫も同じ大学だろう。

ケンシ「ケンシだ、よろしく頼む。」

人工人間でも常識は持つていて。

俺は紫が差し出した手をつかみ握手した。

握手し終えた後、紫は口を開き言葉を放つ。

紫「私が貴方の生活面をサポートを担当するわ。あとそれと敵が貴方の素性を探らないよう四年前国が設立した高校へ通つてもらうわよ。」

ケンシ「…………はつ？」

一体何を言つているんだ。

紫の言葉に俺は思考が停止した。

マスター^ズ「要するにお前はジャパンに滯在中、戦闘や調査以外はハイスクールライフを送れって言うことだ。まあ任務は夜が中心だ、昼間なんか暇で仕方ないだろう？」

こんな馬鹿げた内容は聞いた事がない。

紫「それとこれから貴方は『八雲 ケンシ』と名乗りなさい。」

ケンシ「……八雲…ケンシ…」

紫と同じ苗字のだが…まさか…

その時、紫は笑みの表情を見せた。

紫「そうよ、これから貴方は私の家族よ。俺は片手で頭を押さえ深くため息を吐いた。

こんなアホな任務内容は初めてだ。

そして色気声出した紫に俺はこいつの性格は痴女だとわかつた。

紫「…今変な事考えなかつたかしら?…」

ケンシ「いや何も。」

どうやら彼女は考へてゐる事を読み取れる力があるようだ。

マスター^ズ「ユカリ以外にも協力者が居る、彼らにも頼るといい。
現地（ジャパン）入りは1週間後、任務開始日は4月の半ば、後の事
は依頼書とユカリに聞け。」

ケンシ「了解。」

この任務を引き受けた俺は、この先予想もしなかつた出来事が次々
と起きたのだつた。

家族 本編 前編

3月7日、日本、成田国際空港、第1ターミナル、南ウイング
デルタ航空が経由している飛行機から1人の少年が降りた。
人間の手により作られた少年が。

日本の玄関口と呼ばれる此処成田国際空港は曜日問わず人が多い。
少年の名前はケンシ。

ケンシは日本に降り立った。

入国検査では「八雲 ケンシ」と書かれた偽造パスポートを提示し
入国した。

銀色の髪を持つケンシは身長も高くモデル体型である所為か周り
の人を振り向かせる。

その為、ケンシはスポーツ用サングラスと帽子を身に付けてボスト
ンバッグを背負って歩いた。

がしかし逆に税関検査で怪しまれてしまい幾つか質問されてしま
う始末になつた。

10分後何とか税関検査を終えたケンシはボストンバッグを手に
取り国際線到着ロビーへ向かつた。

到着ロビーに着いた。

ロビーには税関検査を終え出て来るの待っている人達が大勢いる。
その中でケンシはスーツに身を纏つた金髪の女性を見つけた。

その女性の名前は八雲 紫

日本でケンシの生活面をサポートする国防省の人物。

そしてこれからケンシが仮の家族になる家族。

ケンシはスポーツ用のサングラスを取り紫の方へと歩む。
彼女もケンシに気づき笑顔で手を振る。

するとケンシはある事に気付いた。

紫の左にケンシと同じ年に見える金髪のショートヘアの少女、左に
は小柄な身長で茶髪のショートヘアの少女、この2人の少女も紫と同

様こつちを見ている。

紫「日本へようこそケンシ♡初めての旅客機はいかがだつたかしら？」

紫は相変わらず色氣ある声と日本語でケンシをして迎える。

今回ケンシは一般人が乗る旅客機で日本へ来た。

軍の輸送機しか乗つた事しかない彼は初めてだつた。

ケンシ「流石にやり過ぎだぞ。」

ケンシは英語でそう言いポケットの中から今回乗つて来た飛行機のチケットを紫に見せた。

そのチケットはファーストクラスのチケットだつた。

そう、ケンシはファーストクラスで日本へやつて來たのだ。

紫「ウフフツいいじやない、これが日本の『おもてなし』よ♡」

これが日本のおもてなしだ、と紫は英語で言う。

喜んでいる紫に対しケンシは心の中で呆れかえつていて。

そんな中、紫の左右に居る2人の少女はケンシをジツと見ている。

ケンシ「で? この2人は?」

ケンシはこつちを見ている2人に顔を向け紫に聞く。

2人はドキッとした。

紫「この子達? 子達は私の義娘よ。そして貴方はこの2人の兄になるのよ♡」

紫に2人の娘が居ると事にケンシは驚いた。

ケンシ「お前に子供が居るのはいいが『兄』と言う事はどういう事だ。」

紫の肩を掴み顔を近づけ耳打ちするケンシ。

紫「あら? 言つてなかつたかしら?」

ケンシ「そんな事一度も言つてないぞ、コレも任務の一つか。」

紫「ええ、一応ね。これから貴方が行く学校はあの子達が通つてゐる学校よ。貴方の事はアメリカでずっと暮らして いた兄だつて伝えあるから本性はバレてないわ。」

ケンシ「……」

ケンシが通う学校は紫の娘2人が通う学校。

紫がケンシの本性を偽つた所為か2人はケンシの事を兄だと思っている。

ケンシはこれからややこしくなりそうだ、と心の中で呟き紫の肩を放し元に戻る。

紫「橙、藍、2人のお兄さんよ、これから一緒に生活するから挨拶しなさい。」

紫は日本語で彼に2人に挨拶して、と言う。

すると金髪の少女がおどおどした口調で自己紹介を始めた。

藍「お、お初にお目にかかります！わ、私の名前は八雲 藍と言います！よ、よろしくお願ひしますお兄様！」

勢いよく頭を下げ礼をする。

今度は茶髪の少女が挨拶する。
橙「は、初めまして！八雲 橙です！」、これからよろしくお願ひします！」

緊張しているのか目をつむつて頭を下げる。

誰もが可愛らしいと思うがケンシは思わなかつた。

ケンシ「八雲 ケンシダ、ヨロシク。」

ケンシは日本語で藍と橙に挨拶をする。

9年間アメリカで過ごして来た為か日本語がカタコトだつた。

その所為か藍と橙は顔を上げ啞然とする。

すると紫がパンツと手を叩き話を区切る。

紫「さあ、お互い自己紹介を終えたところだからお家へ行きましょ。」

俺と八雲一家は車に乗り高速道路を走っている。

運転は紫、隣の助手席は橙、残つた藍と俺は後部座席。
車はレクサス、中は極普通で快適。

前に居る橙と紫は仲良く会話、藍は下を向いてチラチラと俺の方を見る。

一方、俺は車の窓から見える日本の風景を眺めていた。

9年間振りの日本。

昔と随分変わっていた。

何か日本にいた時を思い出す。

9年前の俺は両親に暴力を喰らう虐待されていた。

その時はまだ真実を知らなかつた。

あの頃の俺には優しい妹が居た。

俺と同じ髪の色だつた。

今でも忘れていない。

妹は両親に虐待されていなかつた。

むしろ可愛がられていた。

妹は俺が虐待されている事を知らない。

何故なら妹が居ない所で俺は虐待されていたからだつた。

10歳の時だつたか。

俺の体内を循環するナノマシンが真実を教えてくれた。

家族だと思つていた両親、妹は家族ではないと。

そして自分は人間によつて作られた「戦うための人間兵器『人工兵士』」だと。

真実を知つた俺はショックを受けたがナノマシンに寄つて平常心を保たせてくれた。

妹だと思つていた者は実は妹ではない。

俺は何故、両親が暴力を振つてくるのか理解した。

「本当の家族じゃないから」

単純な事だつた。

俺は妹と両親を恨み始めた。

だが妹には、何も悪くない。

こうして全てを知つた俺は家を出て行つた。

日本は嫌な思い出しかない。

残酷で、悲惨で、刹那で仕方がない。

藍「あ、あのー」

突然横に座つてゐる藍が日本語で話掛けて來た。

口調から察するにまだ緊張している。

俺は顔を藍に向かた。

藍「ワ、ワツト ドウユー……」

今度は英語か。

日本語が力タコトな俺の為に英語で伝えようとしているのか。

ケンシ「ニホンゴデイイゾ。」

藍「で、でも……」

ケンシ「日本語ガカタコトナダケダ。コトバハリカイハシテイル。アト、ソンナニキンチヨウシナクテイイゾ。」

すると俺の言葉で緊張が解れたのか藍の表情が笑みえと変わつた。

藍「それを聞いて安心しました。」

ケンシ「ソレデドウシタ？」

俺は藍に用件を聞いた。

藍「アメリカで何をしていたのですか？」

どう答えればいいだろうか？

ハイスクールに通つていたと答えるば詳しく聞かれる。

だから俺は

ケンシ「…グンデハタライティタ……」

人工兵士だと言う事を伏せて答えた。

藍は驚くだろう。

だが違つた。

納得している表情だ。

藍「そうですか。だから紫様はお兄様の事を隠していたんですね。」
隠してた？

どうゆう事だ？

紫はこの2人に俺の事を何と言つたのだ。

俺はまだ「八雲 ケンシ」と言う人物をまだ余り捉えてない。

それは後で名前を付けた紫に聞くとしよう。

藍「どうして軍に？」

ケンシ「ホカニイクアテガナカツタカラ。」

俺は軍以外行く当てがない。

そう作られたからな。

藍「でも、他にあつたのでは？」

ケンシ「タタカウコトシカノウニナカツタカ。」

藍「そうですか……」

少し藍は俯いた。

俺の事を思つてだろう。

別に気を使わなくてもいいのに。

ケンシ「ベツニキヲツカワナクテイイゾ。」

藍「いいえ、お兄様ですから使いますよ。でも嬉しいです。」

笑顔でそう答える藍。

今の俺は藍と前に居る橙の兄である。

でも俺はこの2人と同様、血の繋がった紫の息子でもない。

ましてや2人の兄じやない。

俺は再び窓に顔を向けた。

家族 後編

八雲家の家に到着した。

高層マンションだつた。

車から降りたケンシは高層マンションを見上げた。

見た目から見ればセレブやVIPが住むマンションである。

ケンシ「タカイナ。」

ケンシは思わず日本語で口にしてしまう。

すると

橙「エへへ、すごいでしょ？」

橙がケンシの左腕を抱きしめ照れ臭そう笑いそして喋る。

その表情はまるで太陽だつた。

橙「私達の家はこの上なんだよ！」

ケンシ「……ソウカ。」

ケンシを含めた八雲一家はエレベーターで最上階まで上がり部屋の玄関で立ち止まつた。

橙はカードキーで玄関のドアのロックを解除して勢いよく開ける。

橙「たつだいまー！」

そして大きな声で叫び中へと駆けて行く。

藍「こら橙！走つては駄目だといつも言つているだろうが！」

廊下を駆けて行く橙に対し藍は怒り、橙の後を追う形で中へと入つた。

ケンシ「……」

そんな2人の姿をただ無表情で見るケンシ。

紫「此処が私達の家よ、さあ入つて入つて。」

彼の後ろに居る紫がケンシを部屋へと招く。

彼は無言のまま中へと入つた。

日本は土足で家へ入るのではなく、玄関で靴を脱ぐ習慣がある。

半分日本育ちであるケンシは日本の常識いわゆるジャパニーズスタイルを知っている。

玄関の中で靴を脱いだケンシは廊下を进んだ。

廊下の横に二つドアがあつた。

其れ等はトイレ、洗面場付きのお風呂場だった。

廊下を突き進むと広いリビングに出た。

一般的のリビングより2倍あり、バルコニーや大きなキッチンがあつた。

橙と藍の姿が見当たらない。

しかし叱る声は聞こえる。

多分自分の部屋に居るのだろう。

紫はケンシの後にやつて来た。

紫「どう？すごいでしょ？」

日本語で話しかける紫。

黙っていたケンシは口を開いた。

ケンシ「日本の国防省は儲かっているんだな。」

日本語に対し英語で返す。

紫「ウフフ、女性に仕事やお金の話を持ち出さずのはタブーよ。」

英語に対し紫も英語で返す。

そして懐から扇子を出し開いて口を隠す。
おまけにワインクも付ける。

ケンシ「じゃあお前は女性だからこの任務を放棄しよう。」

紫「あら、一本取られちゃつたわ。ウフフ。」

ケンシ「……」

小さく高笑いする紫にケンシまた口を閉ざしてしまった。

紫「それじゃ、今から貴方の部屋を紹介するわ。ついて来て。」
氣を取り直して紫はケンシの部屋を案内した。

紫「此処よ。」

紫はある部屋のドアを開けた。

その部屋はケンシが使う部屋だつた。

ケンシは中へと入つた。

部屋の中はリビングと同様洋風、

家具は箪笥とベッドとL字デスクだけ。

スーツを入れるクローゼットはあるが荷物が少ないケンシには必要無いだろう。

ケンシ「すまないな、部屋まで用意してくれて。」

紫「客間用に使つてたけど客と言う客は来ないからちょうど良かつたわ。」

ケンシ「そうか、それは良かつた。」

ケンシの言葉を聞いて少し笑みを見せる紫。

すると彼女はドアを閉めロックし表情を変える。

部屋の中はケンシと紫だけになつた。

紫「これから的事を話すわ。あなたが通う学校は政府が一番力を入れている学校よ、そこの生徒は必ず学生寮で暮らさないといけないルールがあるの。」

ケンシ「ルール？ 何故寮に入らないといけなんだ？」

紫「島だから。貴方と藍そして橙が行く学校は島を土地としている高校、ショッピングモールと言つた娯楽施設もあるわ。」

ケンシ「つまりスクールタウンってやつか。」

紫「ええ、生徒達は『幻想郷』と呼んでいるわ、話を戻しましょう。学校の名前は国立『幻想学園』中等部と高等部が二つある学校よ、貴方は高等部の一年生になつて貰うわ。それと貴方をサポートする者も居るから何か困つた時には聞いて頂戴。」

ケンシ「質問がある。」

紫「何？」

ケンシ「藍と橙に俺の事をどう話した。まだ俺は『八雲 ケンシ』と言う人物を把握していない。」

紫「そうね：強いて言うなら『ある事情でアメリカに暮らす事になつた実の息子』ね。」

ケンシ「藍が車の中でアメリカで何をしてたのか、と聞かれた時軍

で働いていたと答えたなら納得していたぞ。」

紫「……それはそうよ、だつてあの2人には隠し子だ、て1週間前に言つたのよ？」

ケンシ「もう少し偽り方を考える。」

紫「……めんなさい、急な事だつたから。」

ケンシ「…………まあいい、此方にも落ち度がある。上手く演じればいい話だ。」

紫「助かるわ、それじや私はご飯の準備に行くわ。これから宜しくねケンシ。」

ケンシ「ああ、宜しく頼む紫。」

紫「ここでは紫じやなくて『お母さん』よ。」

ケンシはデコに手を置いてため息を吐いた。

ケンシ「ワカツタヨ母サン。」

そしてカタコトな日本語で紫を「母さん」と呼んだ。

紫は嬉しかつたのか鼻歌を歌いながらケンシの部屋を出てキッチンへ向かつた。

1人となつたケンシはL字型デイスクの椅子に座り深く息を吐き天井を見つめた。

ケンシ「これから大変だな。」

幻想学園と出会い 前編

4月7日

日本へ現地入りして八雲家に住んでから1ヶ月が経過した。カタコトだつた日本語は徐々消え今では普通に話せる。

妹の藍と橙は楽しそうに俺と接してくれる。

俺もそれなりに2人接するが「本当の笑顔」と言う表情は見せない。いや見せれないのだ。

隠しているわけではない、出来ないのだ。

ナノマシンが平常心を一定にする為に制限をしているからだ。

少し笑みの表情は出せるが例え笑うとしたら戦場や部隊の仲間だけだ。

話を変えよう。

今、俺は藍と橙と一緒に荷物を持つて学園の制服姿でヘリに乗つている。

このヘリは人を運ぶ為のヘリである。

その為、中は綺麗。

俺から見ればV I P専用のヘリだ。

そんなヘリは現在海上を飛んでいる。

何故、ヘリに乗っているか？

それは今から行く所が学園であり学園が所有している島だからである。

船で行く方法もあつたが橙が船酔いする為ヘリで行く事になつた。なら飛行機では？と思うが島に滑走路は存在しない。

橙は中等部の一年生、つまり今回初めてヘリに乗る。

窓に両手添えて外の景色を見ている。

藍も隣にある窓に顔を向け外を見ている。

藍は高等部の二年生である。

18である俺は三年生の筈だつたが、「スクールライフを楽しめ。」とマスターズ大佐に言われ仕方なく一年生になる事になつた。

しかし何年ぶりだろうか、一般的の学校に通うのは。

家を出て行つた後俺はアメリカの軍の士官学校で学んでいた。主に銃や戦場、体術、戦場で生き抜く為の技術が多かつたな。過去を少し振り返つている内にヘリは島の上空を飛んでいた。すると橙ははしやぎ出した。

それを藍が止め注意する。

ヘリポートが見えて来た。

ヘリは飛行しながら高度を下げる。

ランディングゾーンの真上に入つた時、ヘリは宙に停止しのアを開してランディングゾーンへとタツチダウンした。

しばらくするとパイロットの2名のうち1人がヘリから降りて後ろのスライドドアを開け俺たちを外へと誘導させる。

荷物は学園の職員が寮に持つて行く為、荷物はここで放置。

ヘリポートは広く数機のヘリからが止まつていて。

そして学園の生徒が数十人居る。

すると藍が「お兄様、橙、ここから私が学園まで案内します。」と言った俺と橙を学園まで先導してくれた。

ヘリポートを出ると藍はバスターミナルで足を止め、バスで学園の正門まで行くと言つた。

どうやらここから学園までの道のりが長いらしい。

学園行きのバスがやって來た。

俺達はバスへと乗り込んだ。

俺達学生は学園が払つてゐる為、自分たちが払う必要はない。誰もが便利だと思うだろう。

他の生徒達もぞろぞろと入つて来てバスは満員になつた。満員バスは学園へと走り出した。

俺は席に座つてゐる。

そして藍も橙も左右の席に座つてゐる。

バスの揺れの中、橙は俺の腕を抱きしめて來た。

揺れないようにしてゐるのだろう。

だが何故だろうか。

橙「＼＼♪」

橙が嬉しそうな表情をしている。

そんなに揺れないようにするのが楽しいのだろうか？
すると何か視線を感じた。

首を少し動かしその方向へと視線を向けた。

藍「……」

視線を感じたのは藍からだつた。

何故だ。

藍の表情は羨ましいそうに見えるが何か不満そうにも見える。

ケンシ「……どうした藍。」

藍「……いいえ別に……」

藍は Pruitt と反対の方へと顔を向けた。

ケンシ「……？」

何故か機嫌を損ねた藍。

すると

橙「エヘヘッ、藍様もお兄様の事がすー……」

藍「コ、コラ橙！な、な、何を言おうとしてるんだ／＼／＼

橙が最後何か言おうとしたが、さつき機嫌を損ねた藍が突然橙の言葉を遮り顔を赤くする。

藍「お、お兄様も勘違いしないでくださいよね？本当に何もありませんから／＼／＼

ケンシ「……ああ。」

勘違い？

何が何だかさっぱりわからない。

俺は考えるのを止め目を閉じた。

時間が少し経ちバスは学園の正門（校門）前に到着した。

バスの中に居た生徒達はぞろぞろとバスを降りた。

ケンシ達も同じくバスから降りる。

満員だつたバスは一瞬で空きになつた。

そしてバスは出発して行つた。

俺達は魚の群れのように生徒達と校門を潜り抜けた。

最初に目に映つたのは、目の前にある広い庭だつた。

作りが西洋風と和風が混ざった感じだった。

すると俺と橙を先導してくれた藍は立ち止まつてこつちを振り向いた。

藍「2人はここで待つて下さい、後10分ぐらいで先生達が来て指示をしてれます。私は実行委員ですので一度ここでお別れです。あつ、後これを……」

すると藍は制服のポケットからパンフレットを貰つた。

藍「これは今日の予定が書かれています。学園の地図も入つてますので軽く見てください。」

ケンシ「ああ、わかつた。」

橙「わかりました藍様！」

橙は元気に返事をする。

がしかし

藍「橙、お兄様に迷惑をかけるなよ。」

橙「わ、わかりましたあ……しょぼん。」

最後の最後に藍が念を押した。

元気だつた橙は片を落とし暗い声で発した。

藍「ではまた。」

藍は俺に軽く礼をしてこの場を去つた。

藍が去つた後、俺は周りを見渡し。

そして貰つたパンフレットから地図を開き学園の建物を把握した。

最初にわかつたのは、右側近くにとても大きな建物、アレは「総合体育館」と言う建物で内容は書かれてないが恐らく中等部と高等部が合同行事の時に使うのだろう。

だが主に中等部が使つている。

それがわかる理由は、今から言う事。

次にわかつた事は中等部と高等部の校舎は別々だと言う事、そして高等部の校舎はここから遠い事だつた。

地図を見ると中等部は総合体育館と繋がつて居る。

校舎は横長の三階建てが3つ、グラウンドがある。

高等部はここから直進した先（500メートル先）にある。

校舎は四階建ての西洋風が4つ、体育館がひとつありグラウンドもある。

軽く見るてわかつた事はこれだけだ。

パンフレットを制服のポケットにしまった。

橙「ねえお兄様、人がさつきよりも多くなりましたよ。」

俺の制服の裾をクイクイと引っ張り不安そうに言いかける橙。

確かに辺りを見るとさつきよりも多くの新入生が溢れかえっている。

ここに居るとあつ苦しい為、端側による事にした。

ケンシ「橙、端側に行こう。」

橙「はい。」

俺は橙と逸れないよう手を握つて先導し端側まで辺り着いた。丁度ベンチがあつた。

橙の手を繋いでいたを放し、橙と一緒にベンチに座つた。
ここで指示があるまで待つ事にしようと考えた。

その時だった。

???「いい加減にしてくれ！うつとおいしいぜお前ら！」

突然、大きな声が耳に入つた。

声からすると女つまり女子、だが男口調全開だつた。

声がする方へ俺は顔を向けた。

後ろ姿の金色の長髪の少女がチャラチャラした3人の男子と対立していた。

「いいじやんいいじやん、俺達もう友達なんだから。」

「絶対他の男共より断然いいて。」

「もう友達なんだからそろそろ名前教えてよ。」

???「だからいい加減にしろよ！チャラチャラしてお前達に私の名前なんて教えてやれるかよ！」

会話から察すれば金髪の少女はこの男子生徒3人組にナンパされ困っている状況だった。

するとさつきまでユーモアな口調をしていた3人組の1人が一変し口調が変わった。

するとさつきまでユーモアな口調をしていた3人組の1人が一変し口調が変わった。

「だつたら犯してでも教えて貰おう羽目になるぜ？」

舌なめずりをする男子生徒。

他2人はエゲツない声で笑う。

この言葉で大体コイツらの目的がわかつた。

金髪の少女体が目的だ。

金髪の少女は苦悶の顔をしていた。

困っているようだ。

ケンシ「なあ橙。」

俺は顔を向こうに向けたまま橙に話を掛けた。

橙「なに？ お兄様。」

ケンシ「少しここを離れるが直ぐに戻る。」

そう言つて俺は立ち上がり金髪の少女の方へと向かつた。

霧雨 魔理沙

これが彼女との最初の出会いだつた。

幻想学園と出会い 中編

ここは国立幻想学園。

四年前日本政府が「将来を担う者の為に」と設立された学園であり中等部と高等部が存在する。

幻想学園は横浜港から南に58キロの島にある。

元々その島は昭和まで人がいたが平成に入ると無人島化してしまった島だった。

だが今は幻想学園が島を所有しているお陰で賑やかになった。この島はほぼ学生が占めている。

娯楽施設が集まっている島の中央街「幻想郷」には娯楽施設で働いている大人は存在するがそれでもだ。

その為この島は別名「学園都市」「スクールタウン」などと呼ばれている。

幻想学園は今日、入学式を迎えていた。

新入生や進級生（幻想学園元中等部三年）は学園の庭に待たされている。

???「だからいい加減にしろよ！ チヤラチヤラしてるお前達に私の名前なんて教えてやれるかよ！」

そんな中、進級生の女子が新入生の男子3人組にナンパさせていたのであつた。

私の名前は霧雨 魔理沙。

この学園の元中等部三年いわゆる進級生だぜ！
でも今はそんな事を言つている場いいじゃない。

今は3人のチヤラ男に絡まれいる最中。

見た事ない奴らだつたか恐らく高等部の新入生。

いきなり「名前を教えて」「友達になろうよ」「この後どつか行かな
い？」など話しかけられて来た。

私は拒否するがコイツらはしつこく話をすると。

先輩達は高等部の新入生の男子には注意しろと言わされて來た。

私なりに注意して人目に付かないところに居たのにまさかこうなるとはなあ。

すると3人組の1人がいきなり「だつたら犯してでも教えて貰おう羽目になるぜ?」と言い舌舐めずりをする。

キモいぜ。

他の2人はゲスい笑い声を出す。

クソ、こんな時に靈夢とアリスが居れば。そんな時だつた。

??? 「おい、彼女が嫌がつてゐるぞ。」

後ろから銀髪の男が現れた。

ケンシ「おい、彼女が嫌がつてゐるぞ。」

俺は金髪の少女の横に立つた。

ゲラゲラと笑つていた2人は俺の登場により不機嫌な表情になつた。

舌舐めずりをしていた変人も同様、不機嫌な表情になり口を開いた。

「はあ?お前誰?」

ケンシ「制服見てわからないのか?新入生だ。」

「んうなもん知つてるわ、俺が言いたいのはテエメーは何もんだつて言つてるんだよ。コイツの知り合いか?それとも彼氏かあ?」

腹が立つてゐるのか変人はますます口調が変わる。

ケンシ「残念ながらどこも入つていない。ただ彼女が嫌がつているから来ただけだ。」

「ハッ!正義気取りか笑えるな!テエメーには関係ないんだよ!」

すると変人は拳を構えて俺に殴りに掛かつて來た。

拳は俺の顔にやつて來た。

だが遅い。

俺は変人の拳を掴み止めた。

「ツ!?

驚きの表情がはつきりと見える。

ケンシ 「狙いはいいが遅いな。」

俺は徐々に拳を受け止めた手に力を入れた。

「放せッ！ クツ！ ……クソッ！」

次は苦悶の表情を見せる変人。

俺は変人の拳を突き放した。

突き放した所為で後ろへよろめいて後ろに立っていた2人に激突した。

すると

「ふざけんじやねえ！ 殺すぞオゴラア！」

激声を吐き散らした。

いわゆる逆ギレだ。

その所為で庭で待つていた新入生と進級生が視線を向けてきた。

「いい気になつてんじやねーぞクソが！ お前らコイツをやるぞ！」

「おう！」

3人は殴りに掛かつて來た。

ケンシ 「おい、危ないから下がつてろ。」

俺は手で金髪の少女を後ろへ下がらせた。

??? 「で、でも3人相手じやあ……」

心配そうな表情で俺を見る。

俺も弱く見られたものだな。

ケンシ 「大丈夫だ。」

そう言つて俺は3人に目を向け低く腰を構え真ん中の変人に接近でき事にした。

腹がガラ空きだった為、でも俺は低い体勢のまま変人に接近できた。

そして右の拳で変人のアゴに1発食らわした。

変人は口ケットのように後ろへ飛んだ。

次に左右にいる2人だ。

「このクソッ！」

「いい気になるなよ！」

2人は俺めがけストレートパンチを放つ。

しかし遅い。

俺は一本後ろへ下がった。

すると2人は自滅した。

俺が後ろへ下がった為、左の奴の拳は右の奴の拳へ、右の奴の拳は左の奴の拳へとヒットしたのだ。

まるでカンフー映画のバトルのようだ。

「ぐああああ！」

「イツテエエ！」

余りの痛みに声を上げる2人。

俺はこの2人の後頭部を掴みさつきの拳のように頭をぶつけた。

2人は気絶した。

変人も1メートル先で気絶していた。

結果9秒で力タをつけた。

当然だ。

平和ボケしている人間が戦争の為に作られた俺に叶うはずがない。だが初日にこんな出来事を起こすなんて思つてもなかつた。

周りいた新入生や進級生達はざわざわと騒いでいた。

俺は気にせず金髪の少女の方へと向かつた。

ケンシ「大丈夫か？」

???「全然大丈夫だぜ、お陰で助かつたぜ！サンキュー。」
無邪気な笑顔で感謝する少女。

ケンシ「なら良かつた。」

魔理沙「私の名前は霧雨 魔理沙。お前は？」

ケンシ「…………八雲 ケンシ。」

すると彼女は、いや魔理沙は表情が変わつた。

魔理沙「八雲？じゃあお前は……」

橙「お兄様！」

魔理沙は最後何か言おうとしたが橙の登場で遮られた。

ケンシ「橙、向こうで待つてろつて言つたはずだ。」

橙「だつてお兄様知らない人といきなり喧嘩するんだもん、そりや

橙だつて駆けつけるよ！つてアレ魔理沙？」

魔理沙「よう橙久し振りだぜ！」

橙は魔理沙の存在に気づいた。

魔理沙の言葉から察すれば2人は知り合いだと俺は思った。

魔理沙「て事はやつぱりケンシは橙と藍と同じ紫の子か。」

紫の事も知っているのか。

すると橙は更に話を付け加えた。

橙「お兄様は紫様の血の繋がっているんだよ！」

魔理沙「と言う事は……紫の実息子!?」

思わず魔理沙は声を上げる。

だがそれは嘘だ。

紫が作った偽りだ。

苗字もそうだ。

だがコレら全て任務の為だ。

魔理沙「待て待て待て！紫のヤツ実の息子がいるなんて一度も私や
靈夢に言つてないぜ!!?」

パニツクに陥る魔理沙。

無理も無いだろう。

これ以上橙が話を付け加えないように俺は口を開いた。

ケンシ「落ち着け霧雨魔理沙、コツチにも事情と言つうものがあるんで、察してくれ。」

魔理沙「あ、ああ。わかつたぜ。」

魔理沙は落ち着いた。

魔理沙「それと私の事は気軽に魔理沙って呼んでくれ、なんつーか
肩苦しいだよ呼び方が。」

ケンシ「わかつた、これからそうする。」

橙「あのお兄様？」

橙が裾をクイクイと引っ張り俺を呼ぶ。

視線を橙に向け「どうした？」と答えた。
すると橙はある方へと指をさした。

橙「あの人達どうするの？」

俺と魔理沙は橙が指さす方へと振り向いた。

橙が指さしているのはさつき俺が倒した変態3人組だつた。

魔理沙「アイツらどうするんだケンシ？」

ケンシ「放つておけ時期に眼が覚めるだろう。」

橙「ハツキリ言うねお兄様は。」

最後に「あはは…」と苦笑いする橙。

俺は暴力を振るつてきた奴らに手を差し伸べるほどお人好しではない。

その時だつた。

???「おーい、まりさー」

大声で魔理沙を呼ぶ女の声が聞こえた。

俺たちは声がする方へと顔を向けた。

頭の後ろに赤い大きなリボンを付けたブラウン色の短髪の女の子が此方へと走つて来了。

魔理沙「あっ、靈夢！」

魔理沙は彼女を「靈夢」と呼んだ。

彼女は俺たち（魔理沙）のところまでやつて来了。

???「全くどこ行つてたのアンタは。」

魔理沙「す、すまないぜ。」

???「で？なんであのチャラ男さん達は倒れているのかしら？」

彼女は親指で変態3人組をさした。

魔理沙「実はさつきまでアイツらに絡まれてたんだよ。余りにもしつこくて困つてたらケンシが助けてくれたんだ。」

魔理沙は倒れている訳を彼女に説明した。

???「ケンシ？」

彼女は思わずリピートする。

すると彼女は俺の方へと目を向けた。

???「貴方がケンシ？」

彼女はケンシなのかと確認する。

ケンシ「ああ、俺がケンシだ。」

??? 「そつ、この馬鹿を助けてくれてありがと。」

馬鹿？

魔理沙の事か。

すると横から魔理沙が「誰が馬鹿だ！」と突っ込むが靈夢はスルーする。

靈夢「私の名前は 博麗 精霊、靈夢って呼んで。」

ケンシ「八雲 ケンシだ、よろしく頼む。」

俺と彼女、靈夢は自己紹介をした。

靈夢「八雲って事は紫のところかしら？」

俺は「ああ、そうだ。」と答えた。

靈夢も紫の知り合いなのか。

すると魔理沙が

魔理沙「靈夢、聞いて驚くなよ？ケンシはな紫の実の子なんだぜ！」
自慢するかのように放った。

靈夢「はあ？ アイツが？」

どれだけ紫は信用されていないのか。

無理も無いか、紫は謎が多くすぎる。

靈夢「またそんなウ…………」

橙「本当だよ靈夢。」

またも橙は人が話している間を割る。

靈夢「…………橙それホント？」

橙はコクコクと二度頷く。

靈夢「…………」

靈夢は沈黙した。

そして

靈夢「エエエエエ!?」

大きく目を見開いて驚愕した。

幻想学園と出会い 後編

4月7日

幻想学園総合体育館

「新入生と進級生は総合体育館へ行き入り口前の受付で番号を書かれた紙を取ってください。」

職員達が新入生と進級生に指示を入れた。

新入生と進級生は指示通りぞろぞろと歩き出した。

地面に倒れている3人の男子新入生を置いて。

ケンシと橙、そして魔理沙と靈夢は入り口の受付に居た。

「名前をお願いします。」と受付の係員（生徒）が名前を提示を求めた。

4人は自分の名前を係員に言つた。

係員はタブレットで新入生と進級生の名前が入ったリストから4人の名前を探し見つけた。

見つけた係員は番号が振り当てられた紙を4人に渡した。

「同じ番号がパイプ椅子に記されてますのでそこに座つて下さい。」

すると

「あと八雲さんにはコレを。」

係員はケンシに白い封筒を渡した。

ケンシ「……？」

受け取つたケンシは疑問に思いながら制服の懐に入れ総合体育館の中へ入つた。

「あと八雲さんにはコレを。」

係員から白い細長の封筒を貰つた。

中身が気になるがここで開けたら後ろが混んでしまう。

俺は封筒を制服の内側に入れ総合体育館の中へと入つた。

紙に書かれた番号は1文字のアルファベットと2桁で構成されて居た。

係員がさつき椅子の番号だと言つていたが違う。

基本アルファベットがあるという事は何か分けている。

恐らくクラスの割り振りだろう。

俺の番号は「A-26」だ。た

後ろから魔理少が番号はなんだよ

ケンシ「A—26だ、そつちは。」

魔理沙「私はA-7だぜ。」

と云ふ事は一緒のクニヤのなるのが
「靈廟」也、

魔理沙は自分の横に

靈夢は丁度自分の番号を見ていた。

靈夢　…A—18よ、なんか数字にしつくり来ないわね。」

極めて自分の署号を見た夢は少し幾分を落としてアノン「燈は阿彌陀」一

俺は隣にいる澄にも聞いた。

「JB—25です、お兄様！」

橙は番号の紐を俺に見せた。

机に口等書く。」

魔理沙「て事は私と靈夢とケンシは一緒のクラスつて事だ、やつた

ぜ
！

俺と靈夢と一緒にテアだと喜ぶ魔理沙

靈夢だつた。

靈夢 「またコイツ（魔理沙）と一緒にか……面倒だわ……」

魔理沙　いいじやねーか靈夢

「はう? 」ハジナハハボニ、口等那

緒なのよ!? もう馬鹿騒ぎに巻き込まれるのはゴメンよ!」

魔理沙一馬鹿騒ぎで
思い出作りだぜ。」
おいおいそんな言い方ないせ
アレは

靈夢「じゃあアンタが勝手にレミリアの家上がり込んでパチュリーの部屋から本を盗んだ事はどうゆう事なのかしらね。」

靈夢の目付きが変わった。

目を細くして魔理沙を睨む。

魔理沙「グツ……あつ、アレは……」

靈夢「まさか、思い出作りとは言わないわよね？」

魔理沙「そ、そうだぜそれも思い出作りのひと……」

靈夢「違うわよ!? 立派な犯罪行為よ！ 不法侵入罪よ！」

魔理沙に怒りに怒る靈夢。

まるで親が子に説教をしているみたいだ。

その中で気になる事があった。

靈夢は「中等部」と口にした。

しかも魔理沙も含めての事だ。

俺は靈夢と魔理沙に聞いた。

ケンシ「2人は進級生なのか？」

靈夢「ええ、そうよコイツと同じ中等部よ。」

魔理沙「私はコイツじやなくて魔理沙だ、私と靈夢は3年間一緒の

クラスだつたぜ。」

2人は進級生だった。

そして3年間同じクラスだつたらしい。

橙の席は俺たちの席から遠い為ここで橙と別れる事にした。

別れた後、俺は自分の席を探した。

すると

魔理沙「なあケンシ、さつきの封筒なんだつたんだ？」

横から魔理沙が話し掛けた。

封筒、受付のところで貰つた白い封筒の事を指しているのだろう。

ケンシ「中を見てないからわからない。」

あの時、後ろが混雑するのを避けるよう見なかつた。

靈夢「だつたら今ここで開ければいいじゃない?」

すると今度は靈夢が言う。

確かに封筒の中身が気になる。

俺は懐から封筒を出す事にした。

だがそれはある少女に寄つて止められた。

?? 「あら？ 魔理沙と靈夢じやない。」

前から金髪のショートヘアの少女が魔理沙と靈夢の名前を口にした。

靈夢、魔理沙 「アリス！」

魔理沙と靈夢はその少女、いや彼女の事を「アリス」と呼んだ。
そして彼女の元へと駆ける。

アリス 「2人とももしかしてA組？」

魔理沙 「おう！」

靈夢 「ええ、そうよ。」

魔理沙 「ひよつとしてアリスもA組か!?」

アリス 「ええ。」

魔理沙 「やつたぜ！ 三年の時は一緒のクラスになれなかつてけど事
は一緒だぜ！」

3人の会話を聞くところ彼女アリスは靈夢と魔理沙の知り合い。
楽しそう会話をしている。

俺は邪魔しないよう後ろへと振り返り自分の席を探す事にした。
だがしかし、それはある者に寄つて止められた。

魔理沙だ。

魔理沙は「何してる?」と言つた表情で俺の肩を掴んだ。

魔理沙 「おいケンシ、何処行くんだよ？」

ケンシ 「…いや、楽しそうに話しているから邪魔しないようにと自
分の席を探そうとしてるんだが。」

魔理沙 「いやいや、そりやないぜケンシ私達もう友達だろ。」

ケンシ 「ツ……」

魔理沙が平然に放つた言葉「友達」

その言葉を聞いて俺は引き戻された。

人工人間として

アメリカ兵として

任務として

「八雲 ケンシ」ではなく「ケンシ」として引き戻された。

約一ヶ月紫の家に居たからだろうか。

少しずつ「八雲ケンシ」になり始めてしまった。

役を演じ過ぎて自分を見失うところだつた。

だが俺の本性を知らない魔理沙は「八雲ケンシ」として友達になろうと言つている。

俺は任務の一環として

八雲 ケンシとしてなろう。

俺は魔理沙と共に靈夢とアリスと言う彼女の所まで足を運んだ。

アリス「初めましてアリス・マーガトロイドよ、よろしくね。」
アリス・マーガトロイドはケンシに挨拶をして手を差し出す。

ケンシ「八雲 ケンシだ、よろしく。」

ケンシは差し出したアリスの手を握り握手する。

すると「八雲」と言う言葉を聞いたアリスは靈夢、魔理沙、同様「まさか」と思った。

アリス「八雲つてもしかしてあの？」

ケンシ「あの」と言われてもわからないのだが俺は母、八雲紫の実の息子だ。」

アリス「エツ!」

アリスはケンシが紫の実の息子だと知り驚いた。

だがそれはただの偽りであり嘘である。

アリスは靈夢と魔理沙に本当なのか確かめる。

2人は本当だと言つた。

アリス「……驚いたわ、養子だつたらまだ分かるけどまさか血の繫がつてゐる息子だなんて。」

目を見開きながらそう言うアリス。

ケンシ「魔理沙と靈夢と同じ反応だな。」

アリス「そりやそうよ、だつて……」

『間も無く入学式並びに始業式が開演します、席に座つていらない生徒達は速やかに自分の席へ座つて下さい。』

アリスは最後何か言おうとしたがアナウンスにより消された。

ケンシ「まだ俺たちは席を探してない、話は後にしよう。」

アリス「ええ。」

まだ自分の席を見つけていないケンシ達はそれぞれの席を探す事にした。

とある部屋である人物がディスクで書類を目に通していた。

八雲 紫だつた。

今紫が目にしている書類は今年幻想学園に、入学、進級する生徒のリストだつた。

その中で紫はある生徒を重視していた。

それはケンシでもなく、ケンシをサポートする協力者でもなく、博麗霊夢や霧雨魔理沙、アリス・マーガレットと言う知り合いに近い者でもない。

政治としての立場、そしてある立場としての視点である。

紫「この子もついに高等部に上がつてきたのね。」
書類をディスクに置いて立ち上がる。

そして窓の方へと視線をやる。

窓の外には満開の桜があつた。

紫「妹の方はまだ中等部だから安全でいいけど、姉とその周りに居る人達が危険に晒されるわね。」

紫は窓へ歩み手を添え一本の桜を見て言い放つた。

紫「さあ、『何処の国が仕掛けて来る』のかしら？」

するとチャイムが鳴った。

学校のチャイムの音が鳴った。

鳴つて数十秒後にドアの向こうからノックの音が鳴る。ノックの音を耳にした紫は体をドアの方へ向け「どうぞ。」と言つて

入室を許可した。

するとある女性が入つて來た。

??? 「お時間になりましたのでお向かいに参りました。」

紫 「ご苦労様、慧音。」

紫は彼女の事を「慧音」と呼んだ。

慧音「いえいえ、それでは行きましょウか

『八雲理事長』

』

彼女、慧音は紫の事を「八雲理事長」と呼んだ。

ハプニング

『皆様御起立下さい、只今から平成##年度幻想学園入学式及び始業式を始めます。』

4月7日

総合体育館で入学式が始まった。

舞台前方に新入生と元中等部三年の進級生が、その後ろに高等部と中等部の在校生が居る。

生徒達はその場で起立し立っていた。

俺も新入生としてその中に含まれている。

司会が「御着席ください。」と言った後生徒達は自分の席に座った。

こうして式が進められた。

まず初めに日本文部科学省のトップの祝いのスピーチからだつた。自分の席に座っている俺は耳も向けず無心になつていた。

どこも学校も入学式でのお偉い様のスピーチは誰もが「つまらない」と言う。

数十分後、次は高等部と中等部の生徒会長の話だつた。

これも無視した。

『統まして、幻想学園理事長から挨拶。』

次に学園の理事長のスピーチだつた。

ケンシ「…………」

この時、俺は無表情だつたが内面驚いた。

理事長と言う人物は俺が知つて いる人物の事だつた。

その人物はマスターズ大佐が生活面をサポートすると紹介された人物であり、現任務で俺に「八雲 ケンシ」と苗字を付け自分の家族にし血の繋がつた息子だと義妹の藍と橙に偽つた赤い瞳を持つ金髪のロングヘアの人物、

である。

八雲 紫

日本に来る前に学園の資料を目に通したが何処にも紫の名前は載つていなかつた。

藍と橙、まつしてや本人の紫は俺に何も言わなかつた。

どうゆう事かわからない。

紫は舞台に上がり真ん中に置かれたマイク付きのスタンドを後ろに立ちスピーチが始まつた。

紫『桜が満開する中、中等部に入学する新入生、高等部に入学する新入生、入学おめでとうございます、そして中等部で3年間過ごし高等部へと進級する進級生の皆さん、進級生おめでとう……』

途中で俺は紫のスピーチを聞くのを止め何故ここに紫が居るのか考え始めた。

ひとつの過程を立てる事にした。

もし本当に紫が学園の理事長だとしたら国防省ではなく学園を作つた日本の政府のひとつ、教育を専門とする文部科学省がやる事だ。

だが紫は国防省。

例え国家公務員と言う職でもジャンルは違う。

この仮説は違うか。

やはり人物は謎が多い為オーバーに考えるべきか。
だが要素がない。

そんな事を考へてゐる内に紫のスピーチは終盤を迎えていた。

紫『：話を終わる前に少し余談になるけど、実はうちの子2人が入学生の中に居るの♪次の新入生代表のスピーチが楽しみだわ、終わります。』

ケンシ「…………」

スピーチの終盤は余談、しかも俺と橙の事を言つて終えた。
飛んだ恥さらしだ。

そして紫は新入生代表のスピーチが楽しみだと言つていた。
何故か俺と橙何方かやる事になつてゐる。

『新入生意志表明、新入生代表：『八雲 ケンシ』』

ケンシ「……」

司会は俺の名前を呼んだ。

どうやら橙ではなく俺のようだ。

だが俺は前日職員からも何も言われておらずましてやスピーチの内容を考えてない。

その時、俺は体育館の入り口の受付で貰つた白い封筒の存在を思い出した。

まだ中身を見ていない為確信が持てない。

俺はゆっくりと立ち上がり席を離れ赤いカーペットの上を歩んだ。髪の色のせいか物凄く周りから視線を感じる。

ある者は隣の者に耳打ちしながら、ある者は啞然としながら。

そんなこんなで俺は舞台へと登壇した。

紫は満足そうに笑みを浮かべている。

俺は少々紫を睨みながら制服の内側のポケットから封筒を取り出し中身を開いた。

日本語が縦字で書かれており「決意表明」と最初に書かれていた。スピーチの紙だった。

まさか受付で貰つらたあの封筒はスピーチの紙だったのかと思いながらマイクを俺の方に向け紙を見ながらスピーチを始めた。

ケンシ『意志表明…我々新入生は初めて桜が満開している校門を潜りましたー……』

マスターズ大佐は任務以外スクールライフを楽しめと言つた。だが俺は正直楽しめない。

こんなもの恥さらしにしか思えない。

もし彼女がここに居たら笑われるな。

ある女性看護兵を頭の中に浮かべながらスピーチをしていた。

その女性は俺と同じ人工人間で人工兵士。

士官学校で同期だったが俺は戦闘に優れた為飛び級し4年で卒業し戦場へ行つた。

戦場に身を寄せて2年、彼女は俺の小隊に配属された。

彼女は俺の事を理解してくれた。

だが俺は彼女にも仲間にも言わず2年で戦場を後にし、暗殺や工作と言ったC.I.Aやシールズのウェットワーク（汚い仕事）を3年やつた。

その為、彼女とは3年間あつていない。

今頃どうしているだろうか。

ケンシ『……我々新入生はこの学園で切磋琢磨して技を磨き未来の為に頑張りたいと思います、平成##年4月7日新入生代表 八雲ケンシ』

俺は彼女の事を考えながらスピーチを終え舞台から降り自分の席へ戻つた。

設定　主人公

主人公「ケンシ」

クールで冷静、あまり表情を出さない。

自然と周りに人が寄るよる体质で生まれ持ち銀髪で黒い瞳、所為で人を釘付けにしてしまう。

戦闘に優れており戦闘経験豊富である。

「サイボーグタイプ」

サイボーグタイプを使用し展開すると瞳が青に、ドラッグブースタータイプを使用すると赤紅になり、ノーマルタイプを使用すると黒になる。

アメリカ軍が研究している「人工兵士計画」の第1号として誕生日。後、9歳まで日本で一般の家族と暮らしていたが両親の暴力の毎日。

妹は居たが兄が両親に暴力にあつていてことに気付いていない。

9歳で体内に巡回する固定ナノマシンに寄り自分が人工兵士だと気付き家を出て横浜米軍基地へ。

そしてアメリカに渡り士官学校で訓練を受ける。

戦闘に優れた為飛び級し4年で卒業。

記録

13歳で陸軍のアンタレス隊に配属、そしてキプロスへ派遣。

ノーマルタイプとドラッグブースタータイプを使用しキプロスの戦場へ。

人間離れした戦闘から「白い悪魔」と異名を持つ。

1年後政府の命令でアンタレス隊から除隊、その後、空軍に配属しサイボーグ小隊 ストライカーチームを設隊 パレスチナへ配属。チームストライカーが設隊した当初、まだ人工兵士達は士官学校で訓練中の為、メンバーはケンシ一人だった。

その為、「一人小隊」「一匹狼」と呼ばれた。

パレスチナでサイボーグタイプを使用、そして戦闘機のように飛べるニコライザ（後付け）を装着しパレスチナを防衛。

1年後ケンシが15歳の時にイスラエルへ派遣、そして士官学校を卒業した人工兵士5名がチームストライカーに入隊。

半年が経った後、チームのメンバーがイスラム国に拉致。

登場、性根が腐つてた指揮官を殴り無断出撃。

2日間かけてメンバーを救出そしてイスラム国の中堅基地を破壊した。

その後ベースキャンプで「ヒーロー」と呼ばれた。

しかしケンシが殴った指揮官はケンシを反逆罪で処刑を命じられ牢獄へ送り込まれる。

だが指揮官以外の軍人達はそれを猛反対。

すると丁度査察に来たマスターズ大佐がこの事を本国へ通達、その後本国は指揮官を軍規違反で逮捕本国へ戻されケンシは無事牢獄から出された。

そして大尉へと階級が上がった。

それから1ヶ月が経つた頃、ケンシ含め人工兵士達は國に「人権」を要求。

2日後、人権は認められた。

丁度1年が終わる頃、ケンシは自らチームストライカーを除隊し本国へ帰還。

その後、マスターズ大佐の元へ。

16歳になつたケンシは特殊部隊「シールズ」へ入隊。

主に違法武器密輸船を取り締まっていた。

半後、ケンシはCIAの依頼任務も受けた。

依頼任務全てが暗殺だった為、暗殺業界で「ライジングウルフ」と呼ばれた。

1年半後の3月始め、政府直属の「バーバラ搜索及び救出任務」の長期任務を依頼引き受け1週間後「八雲 ケンシ」と名乗り日本へ。

八雲紫の家に1ヶ月間生活する。

紫に年頃の子供が二人居る為、これから兄の役を演じる事なる。
そして幻想学園へ入学し今に当たる。

2人の担任

幻想学園高等部第一校舎1階1年A組

入学が終わり俺は1年A組の教室に居る。

前の黒板には「入学・進級、おめでとう!」とチョークでカラフルに書かれた祝いのメッセージがあつた。

フリータイムな為、クラス生徒達は席を離れ話し合っていた。何もする事がない俺はただ自分の席に座り窓の外の景色を見る。複数の視線を感じながら。

特に感じるのは女子。

近くの女子は俺を「イケメン」やら「かっこいい」「クール」など友達同士で話し合う。

入学式でのスピーチが原因だ。

俺がスピーチをしなければこんなに注目を浴びずに済んだ筈。全て紫の所為だ。

何も情報を教えてくれないのだから。

そんな感じで内面イライラしながら外の景色を眺めていた。

すると靈夢、魔理沙、アリスが俺のところへやつて來た。

魔理沙「まさか新入生代表スピーチをするなんてビックリだぜケンシ。」

両手を頭の後ろに添えニコニコしながら魔理沙は言う。

ケンシ「驚いたのはこっちの方だ、勝手にスピーチの紙が入った封筒を渡されてスピーチさせられ、オマケにこの学園の理事長が紫だったんだ。」

俺は白い封筒を出し机の上に置いた。

そう、紫は幻想学園の理事長だつた。

アリス「紫が理事長なのを知らなかつたの?」

首を傾げアリスは俺に紫が理事長だと言う事を知らないのかと尋ねて來た。

ケンシ「ああ、知らなかつた。」

今度は逆に質問してみた。

ケンシ 「知つていたのか？」

アリス 「ええ勿論。」

魔理沙 「3年間アイツの顔見てるからな。」

紫は自分の事を教えない。

彼女は今朝、朝食を取つていた時「 今日仕事が忙しいから先に行くわね。」と言つて朝食を軽く済ませ家を出て行つたのだ。

靈夢「血の繋がつた家族なのに言わないのねアイツ、それともアンタの為にずっと黙つてたんじやないの、ケンシ？」

ケンシ 「つまりサプライズだと？」

靈夢は紫がサプライズの為に黙つていたのではないかと言つう。確かにそうかも知れない。

それで藍と橙にも口止めされていたとすれば納得がいく。だがスピーチの件を隠す必要はあるのか？

ケンシ 「だつたらスピーチまで隠さなくていいじゃないか。」

魔理沙 「そこは紫に聞かねーと分からぬいぜ。」

魔理沙の言う通りかも知れない。

取り敢えず紫と会う機会があれば色々聞かせてもらうとしよう。チャイムが鳴つた。

靈夢達は自分の席に戻つて行つた。

数秒後、2人の教師が教室に入つた。

1人は胸元を半見せの青と白のヘアカラーの若女性教師、もう1人は顎髭がある30代の外国人だ。

2人は前にある教卓へと着く。
そして女性教師が声を出した。

慧音「新入生の諸君、そして進級生の諸君、おめでとう。この1年A組の担任をする上白沢 慧音だ、1年間よろしく。」

上白沢 慧音。

まるで軍の教官のような喋り方が特徴で男子が好む教師だろう。

ジョナサン「副担任のジョナサン・マカロフです、1年間よろしくお願ひします。」

日本語で生徒達に挨拶するジョナサン・マカロフ。

担任の慧音の真逆で口調が丁寧な教師だ。

だがこのジョナサン・マカロフは本当に教師だろうか。

スース姿だが確かに軍に鍛えられたボディーだ。

そして名前も顔もほぼアメリカ人だ。

大佐から協力者の事を教えて貰おうとしたが分からぬ、と言つて
いた。

つまり任務の依頼書に協力者の名前が書かれていなかつたとい
う事だ。

今、目の前に居るジョナサン・マカロフは俺をサポートする協力者
なのか？

そう思いながら時間は過ぎて行つた。

今日は3限で終わつた。

ほぼ教科書と鞄の配付と学生寮についての説明だつた。

配付された教科書と鞄の中へと入れ学生寮へ行く準備をしてい
た。

靈夢達は準備を終え俺のところへと向かつてくるのが見える。

その時だつた

目の前に副担任のジョナサンが現れた。

そして、

ジョナサン「『雷の狼』でいいよな？」

日本語でジョナサンは俺に放つた。

俺は手を止めた。

「雷の狼」英語で「ライジングウルフ」

この言葉を知つてゐる奴は暗殺業界かCIA、もしくはシールズの
奴らしか知らない。

俺は英語でそうだと答えた。

すると向こうも英語で「話したい事がある、屋上に来てくれないか

？」と言い屋上へと誘う。

ケンシ「……わかつた。」

俺は鞄を手に取り席から立ち上がりジョナサンの後ろを追つた。教室から出て行こうとすると靈夢達は俺を呼び止めた。同時にジョナサンも止まつた。

靈夢「ケンシ、アンタ今からどこ行くの？」

ケンシ「呼び出しだ。」

適当に嘘をつく俺。

そこで魔理沙が食らいついて来る。

魔理沙「ケンシは別に悪い事してないじゃないか！」
だが誤解をしている。

ケンシ「そうゆう意味の呼び出しじやない、単なる話だ。」

魔理沙「そうか……じやあどうする？」

早とちりした魔理沙は理解しこれからどうするのか靈夢とアリスに尋ねる。

するとアリスは口を開いた。

アリス「本当は一緒に寮まで帰ろうと思つてたけど、待つのもアレ
だし今日はやめときましょ、ね？靈夢。」

俺のところに来ようとしたのはその為か。

アリスは靈夢に振つたところ、靈夢は賛成した。

靈夢「ええ、魔理沙もいいでしょ？」

魔理沙「えー……」

魔理沙は不機嫌そうな声を上げ、ダダをこねる。
そこでアリスが母が子に言い聞かせるように魔理沙を言い聞かせ
る。

アリス「『えー』じゃない。、ケンシはこれからマカロフ先生と大事
な話があるのよ。首を突つ込むところじやないの。」

魔理沙「…つたく…わかつたよ……」

するとアリスの効果が効き魔理沙は観念した。

アリスに言われたのが嫌だつたのか子供のように不機嫌な表情を
したが、元の表情に戻つた。

すると改め靈夢が俺の方を向く。

靈夢「と言う事だからまた明日ね、ケンシ。」

ケンシ「…ああ。」

俺は頷きながら言い、教室を出た。

ケンシ。」

協力者

4月7日

幻想学園高等部第一校舎屋上

ケンシの副担任ジョナサン・マカロフはケンシを連れて今、屋上に居る。

ケンシを連れて行く際、彼はケンシに日本語で「雷の狼か？」と尋ねた。

雷の狼、すなわちケンシの事。

英語に変えると「ライジングウルフ」

雷のように速く狼のように獲物を捕らえる。

この単語はCIAやシールズ、暗殺業界と言った裏の世界の者しか知らない単語である。

ケンシ「最初に確認する、『雷の狼』を知っていると言う事はお前は協力者か？」

ケンシは日本語で背中を見せ外を見ているジョナサンに確認を問う。

するとジョナサンは「そうだ。」と英語で答えケンシに振り向き再び英語で喋り出した。

ジョナサン「流石はライジングウルフの名を持つ野郎だな。改めて自己紹介だ、ジョナサン・マカロフだ。元シールズで今はCIA、お前の上司のマスターズと同期だ。」

ジョナサン・マカロフ（36）

アメリカ中央情報機関のひとつアメリカ中央情報局「Central Intelligence Agency」通称「CIA」の諜報員。

ケンシの上司、マスターズと同期で3年前までケンシが今入つているシールズに居た。

つまりケンシと入れ替りと同時にシールズから除隊したと言う事である。

ケンシ「まさかここで元シールズの隊員に会うとは…」

無表情で思つた事を口にするケンシ。

ジョナサン「それはお互い様だ、サポートするヤツがまさかうちの生徒で俺が居たシールズの隊員だとはな。」

ジョナサンも苦笑しながら思つた事を口にする。

ケンシはジョナサンに2つ質問をした。

まず最初にジョナサン自身いつ日本へ現地入りしたのかを聞いた。

ジョナサン曰く、C A Iに入つてから日本支部へ配属され2年前表向きの（C I Aが公表している）仕事「文化的交流」の調査で英語教師として1人の部下とここ幻想学園へ来たと言つている。

彼がC I Aだと知つてるのは今任務の協力者のひとりであり理事長である紫と他の協力者だけだ。

次にバーバラに関しての情報を聞こうとした。

だがジョナサンは知らないと言つた。

ジョナサン「基本俺は後始末や万が一、お前がこの島で他国の工作員と交戦する場合、もしくはお前に危険が強いられた場合、全力で守るのが役目だ。」

ジョナサンの役目はケンシの戦闘をサポートする役目だった。

だが基本はケンシが任務中人を殺した時の後始末をする役目である。

するとケンシはジョナサンがさつき言つた言葉にある事を疑問に思いジョナサンに質問した。

ケンシ「他の国の人と殺り合う事もあるのか？」

日本へ行く前、資料には他の国の中情機関と交戦するといった事は一切書かれていなかつた。

もしそんなケースがあれば任務にも周りの者に危害が出る。

ケンシは一番恐れていた。

ジョナサン「いいや、それは一度もないがロシアの奴らと一度緊迫した時があつた。」

この島で他国の工作員との交戦はないと言つた。

しかしロシアの諜報機関（ロシア連邦保安庁）「F S B」の諜報員と緊迫した状況があつたらしい。

ジョナサン「どうやらこの学園が作られた時、日本の動きが怪しいと早とちりしたロシアの大統領が送り込んだらしい、まあ無理もないだろう。」

学園が作られた当初、他国に怪しまれていた。

幻想学園はこの島を敷地にしている。

ロシアはこの島に何か隠しているのではないかと疑惑し諜報員を送り込んだのだ。

ケンシ「……」

ジョナサン「まつ、とにかくその面については心配するな、向こうが仕掛けてこない限り大丈夫だ。」

彼は他国の諜報員や工作員が仕掛けてこない限りないと言う。

ジョナサン「だが気を付けた方がいい。」

目を細め眉根を寄せ表情を変えた。

ケンシも表情を変える。

ジョナサン「実は、『レミリア・スカーレット』と言う少女が今年中等部から高等部へと進級した。」

ケンシ「……それがどうした。」

ジョナサンが上げた「レミリア・スカーレット」と言う人物。

ケンシはこの人物を知らない。

逆にケンシは任務の支障に関係があるのかと問う。

ジョナサンは元の表情へと戻した。

前の知り合いだそうだ。」「それについては俺の部下から聞くといい、どうやらお

ケンシ「……知り合いだと？」

するとケンシの後ろからドアが開く音が聞こえた。

振り向くと出入り口に学園の制服を着た少年が居た。

その少年はメガネをかけた金髪、金色のような茶色い瞳を持つ少年だった。

???「久しぶりだね、ケンシ」

少年は笑顔でケンシに話しかけた。

ケンシ「お前は……」

ケンシは見覚えがあつた。

少年はゆつくりとケンシのところへと足を運ぶ。

?? 「5、6年ぶりだね、まさか忘れたのかい？僕の事を。」

ケンシ「相変わらずの口調だな……『ジン』」

ジン「そつちこそ相変わらず頑固者だね。」

ジン・テルミット（17）

CIAの人工兵士であり士官学校時代ケンシの後輩。

そして

人工作人間の第2世代の1号である。

ジン・テルミット

小生意気な性格で面倒くさがりや。

だが口が強く戦闘技術は勿論の事、正確な情報収集が得意である。

ケンシと和ませたジンはレミリア・スカーレットについて情報を提供した。

ジン「『レミリア・スカーレット』彼女はST財閥のトップだよ。」

ST財閥（スカーレット財閥）

創始者「アズラ・スカーレット」が第二次世界大戦終結後にフランスで設立した財閥。

貴族の莫大な資金があつた為、今やヨーロッパ全土を占めており車会社、建設会社、を始めとした大手会社が傘下に入っている。

ジンはレミリア・スカーレットが今の社長だと言う。

ケンシはST財閥の名前は知っている。

だが興味はない。

しかし気になる事があつた。

ケンシ「社長にしては若すぎやしないか？」

レミリア・スカーレットは今年高等部へと進級、ケンシと同じ高等部1年生である。

ジン「さあね、本来僕はバーバラについての情報提供と武器の提供、それと戦闘のサポートだからそこはわからぬよ。」

両手を上げ首を左右に振り「わからない」と仕草する。

ジン「けど財閥の権力を握っているは彼女、アメリカと日本以外の国々は彼女の財閥の権力を欲しいがつてはいる筈、僕が言いたい事はつまり……」

ケンシ「財閥の権力を握る為に連中（国々）は彼女を狙うと？」
ジンは日本語で「その通り」と言いパチンッと指を鳴らし人差し指をケンシに向けた。

S T 財閥はヨーロッパ全土を占めている為、莫大な金と国を動かす程の権力がある。

この2つを手にしているレミリア・スカーレット。
だがその金と権力を自分の物にしたいと各国（アメリカと日本を除く）は必ず彼女、レミリア・スカーレットを狙う筈だとジンは推測する。

ケンシ「もしそのような事態が起きたば排除するか見過ごすかだ。」
そのような事が起きた場合、ケンシは国々の諜報員や工作員を殺すか、もしくはレミリア・スカーレットを見過ごす、と言う。

ジョナサン「うわー」

ジン「やれやれだね。」

ジンとジョナサンはケンシの言葉に呆れた。

ケンシ「兎に角だ、この話は『i f』の話だ。俺の任務はバーバラの捜索と救出、そしてバーバラを拉致した奴らを殺す、この2つ任務だけだ。」

任務に害がなければいい話だ、とケンシは主張する。

ジン「本当、昔と変わらないね。僕としてはその頑固な性格を何とかして欲しかつたけどね。」

頑固な性格をこの5年間で直して欲しかつたのかジンはそう言った。

ケンシは性格は変えるものではないと言い、頑固な性格を変えないと言つた。

こうして任務の支障についての話は終わり、ケンシは次の話へと移つた。

ケンシ「他に協力者は?」

ジヨナサン「お前の健康サポートをする奴が来ると聞いたんだが、トラブルが起きてまだ現地入りすら出来ていらないんだ。」

ジヨナサンは1人居ると言うが何らかの問題で日本へ来ていないと言うトラブルが起きている。

ケンシは了解したと言い話を切りこれ以上、ここで長話をしてはいけないと判断した。

ケンシ「バーバラ情報は次の日に聞く、今はこのライフケースクールに慣れないとい。」

ケンシの言葉にジンは入学式の入学生代表のスピーチを思い出し笑つた。

ジン「ハハハツそりや大変だ。」

ケンシ「全くだ。」

これからどう学園生活をすればいいかとケンシは迷つた。

こうしてケンシは生身の人間ジヨナサン・マカロフ、後輩（人工人間第2世代の1号）のジン・テルミットと会つたのであつた。

2人の同居人

ケンシは学園の正門を通り抜け下校していた。

教科書が入った鞄とハンドガンが入った黒いケースを手にして。

幻想学園高等部第一校舎屋上

さかのぼる事10分前、学生寮へと行く為ケンシは屋上から出て行こうとした。

するとジンに止め黒いケースを渡された。

ケンシ「これは？」

ジン「護身用の銃だよ、今のケンシは丸腰だからね。」

そのケースの中身はハンドガンと3つのマガジンが入っていた。
日本に来る前、ケンシは固定ナノマシン以外のナノマシンを体内から取り出している。

その為、ジンの言う通り「丸腰」である。

ケンシ「どんなヤツ（銃）だ。」

ジン「『グロッグ17』君ようにカスタマイズしてあるからセーフティ外せば直ぐ撃てるよ。」

ガンケースの中に入っているハンドガンは『グロッグ17』
1980年にグロッグ社が開発したオートマチックハンドガン。
3年前までオーストラリア軍やアメリカのFBIなどの法執行機関に採用されていた。

ケンシ「……懐かしいな。」

ジン「廃棄処分されかけた銃だから探すのに苦労したよ全く。」
ケンシは士官学校時代、グロッグ17を愛用していた。
腕は確か物でスピードガンマンだつた。

そしてジンは真赤な液が入った注射器を差し出した。

それは人工血液の液色（白色）を人間と同じ液色（赤色）にチエンジする着色液である。

人工人間だと周りにバレないようにする為だ。

過去に何回か使った事があるケンシは受け取つて直ぐに首筋に注射器を当て着色液を注射した。

ケンシ「…………つ」

首筋から体全体に広がる感覺。
そして自分の血の色が変わる。

ケンシは自分の体に循環する白い血を赤い血に偽つた。

幻想学園学生寮（高等部）

学生寮へと着いたケンシ。
見た目はマンショントだつた。

学園で三人一組の部屋の共同生活だと聞いている。

鞆から部屋の階と番号書いた紙、そして部屋カギを手に取り学生寮の中へ入つた。

しかしこの時ケンシはある事に気付いていなかつた。
それは後の出来後に繋がる。

エレベーターに乗つているケンシ。

彼の部屋は最上階の3つ下の5階にある503号室である。
エレベーターが止まりドアが開く。

ケンシはエレベーターから降りて503号室へ向かつた。
荷物はヘリポートから直接部屋に運ばれている。

部屋の前（玄関）に着いた。

横にはインターホンがある。

カギを手にしているケンシは一度鍵穴に入れようとしたが相手が部屋に居る為、不意に開けてはならないと思い出しポケットに入れインタホンを鳴らした。

すると「はーい」と元氣よく返事が聞こえてきた。

ケンシ「……ん？」

だが男の声では無かつた。

女性の声である。

聞き覚えのある声だとケンシは思つた。

その時ドアが開いた。

ドアを開けた人物は今朝、チャラ男達に絡まれた男口調の金髪の女子。

魔理沙「おかえりだぜ！ケンシ！」

霧雨魔理沙。

金色のような黄色い瞳と笑顔でケンシを出迎えた。

俺は学生寮の部屋の前に居た。

ここの中の学園の学生寮は三人一組の共同生活だと聞いていた。だがどうゆう事だ。

何故、魔理沙が俺がこれから生活する部屋の中に居るのだ。

男子は男子寮、女子は女子寮へ、若しくは男子部屋と女子部屋と別れているはずだ。

だが魔理沙は玄関のドアを開け俺を出迎えている。

ケンシ「……どうゆう事だ。」

魔理沙「えっ？」

俺が口にした途端魔理沙はキヨトンとした表情と声を漏らす。

ケンシ「……何故お前がここに居る。」

俺は魔理沙に質問を追求する。

魔理沙は「そう言つてもなあ。」と言い苦悶の表情で頭をかく。すると

靈夢「私達もこの部屋なのよ。」

部屋の奥から靈夢が現れ魔理沙の代わりに答えてくれた。。

ケンシ「男女別々じゃないのか。」

「ええ、確かにそうよ。」と靈夢は両腕で組んで頷きながら言う。なら何故だ。

もう一度自分の部屋の番号を確認したがここで合っている。

靈夢は事情をするから中に入れと言い俺を招き入れた。

部屋は風呂無しの1LDK。

洋室がありそこが寝室である。

リビングは丁度いい広さで勉強用の机が3つ壁側に並んでいる。

テレビや冷蔵庫、エアコンやその他生活に必要な電化製品や家具が揃っていた。

俺は靈夢に寝室に連れられた。

2階建てベッドが1つと普通のベッドが左右の壁に合つた。

すると靈夢は普通のベッドの方を指差した。

靈夢「まあコレを見ればわかるでしよう。」

普通のベッドに顔を向けた。

ベッドの上に荷物が入った俺のサンドバッグが置かれていた。
するとサンドバッグの上に日本語で書かれた手紙が置かれていた
事に気付いた。

俺はそれを手に読んだ。

差出人は紫。

次のような内容だつた。

愛しいケンシへ☆

今、貴方はなんで女の子が2人いるんだつて思つてるでしょ?
ずつと言ひ忘れてたんだけど実は男子部屋の方は一杯なの。

だから貴方はこれから女子部屋で暮らして貰います。

いい加減だと思うけど頑張って*? (^o^)/*

母より

俺は手紙をグシャリと片手で握りつぶした。

あのビツ○め、ふざけた真似を。

心の中で怒りを発しながら内容を理解した。

ケンシ「内容は把握した。」

靈夢「そつ、そう。」

靈夢は戸惑つていた。

この後、リビングで魔理沙と靈夢でこの部屋の決まりを立てた。

部屋に風呂はなく一階にあるので、風呂に関して問題はない。

しかし着替えに関しては女子2人男子1人。

魔理沙と靈夢は物凄く悩んでいた。

そこで俺はリビングで着替えればいいじゃないか、と提案したら俺がリビング、魔理沙と靈夢は寝室で着替える事になった。

掃除については自分の所だけ掃除すればいいと言つたが魔理沙は掃除しないからダメだと靈夢に却下され当番制になつた。

ルールを決めた後、俺は寝室へ行き自分のベッドの下の奥にガンケースを置いた。

靈夢と魔理沙は会話していたので丁度良かつた。

そして俺はサンドバッグから荷物を取り出し始めた。

誘い

4月7日11：30分

学生寮（高等部）

昼になる前、部屋に居る俺はジーパンと黒シャツ姿で寝室のベッドで横になり仰向けで本を読んでいた。

靈夢「魔理沙、アンタいつまでそのキノコ育てるつもり？」

魔理沙「いいじやないかキノコぐらい、私はキノコを育てるのが大好きなんだ。」

リビングの方で靈夢と魔理沙が言い合っている。

部屋と言つたがここは俺の部屋もあるが、魔理沙と靈夢の部屋でもある。

この学生寮の部屋は男女別3人1組の部屋。

だが、俺の同居人2人は女子。

周りから見れば極めて健全ではないだろう。

何故こんな事になつたのか？

理由はある。

それは男子部屋の数がこの年の高等部1年男子の人数が俺を外して丁度だつたからだ。

それを知つたのはこの部屋に来て紫の手紙を見てからだつた。任務に害がないか心配になる。

そう思いながら俺は本を読む。

本は横浜のガイドブック。

救出対象のバーバラがスースイ姿の男等と共に横浜のチャイナタウンを歩いていたところを衛星で捉えたからだ。

バーバラの痕跡を辿るには先ず横浜の街全てを知らなければならぬ。

情報についてはジンが情報網を張つてゐる為、問題はない。

正直なところ、この任務を終わらせてさつさと本国へ帰国したい。

俺はそう思つてる。

だからこそ慎重に任務をする。

それが軍人であり人工兵士だ。

すると顔の横に置いてあつたスマホがバイブを鳴らし通知を知らせる。

ガイドブックを閉じてスマホを手にし、画面を見た。

義妹の藍からのメールだつた。

メールの内容は次に書かれていた。

『暇ですか？授業が昼に終わりました。

もし暇なら橙と一緒に中央街の「幻想郷」に行きませんか？』

藍にこの島の中央街「幻想郷」に行こうと誘われた。

橙も来るそうだ。

幻想郷で生活面で必要な物が取り揃える。

それにこここの島の地形も把握しするのにも丁度いい。

俺はメールを返信して誘いを受け場所と時間を決めた。

そしてベッドから起き上がり財布をジーパンのポケットに入れ寝室から出た。

魔理沙「なんで靈夢はそう怒るんだよ！」

靈夢「当たり前じゃない！ここはアンタだけの部屋じゃないのよ

！」

リビングの真ん中で靈夢と魔理沙は言い合つている。

魔理沙はキノコが入つた大きな透明な箱を持つていて。

さつきから何を言い合つてているか分からないがそのままにしておこう。

俺は玄関の方へと行き靴を履く。

靈夢「ちよつとケンシ、アンタ何処に行くのよ。」

先まで言い合つていた靈夢と魔理沙がやつて來た。

俺は今から藍と橙で幻想郷に行くと伝えた。

すると魔理沙が行きたいと言い始めたが、「なんでアンタは勝手に行こうとするのよ、人の家族の時間を奪うな。」とこつ酷く靈夢に叱られた。

別に来てもいいんだが。

魔理沙「ちえつ。」

靈夢「ごめんねケンシ、邪魔しちゃって。」

俺は、「いや別にいい。」と答えドアノブに手を触れた。

ケンシ「行つてくる。」

靈夢「ええ。」

ドアノブを捻り俺は外に出た。

そして待ち合わせ場所に足を運んだ。